

都道府県別賞一等

偏屈祖父と保険

福岡県 福岡教育大学附属福岡中学校 一学年

高村 将也

「もう本当に偏屈なんだから。」

僕の祖母は、いつも祖父のことをこう言っていた。祖父は自分で会社を立ち上げ、若いときから自由に生きてきたらしい。いつもは無口な祖父だが、お酒を飲むとよくしゃべり、僕のことを褒めてくれる。僕はそんな祖父のことが嫌いじゃなかった。

今から五年前

「じいじが倒れた。」

と母から聞き、僕は心底びっくりした。倒れる数週間前に家族で集まったときは、元気にお酒を飲んでいたらだ。信じられない思いの中、急いで病院に向かった。病院に着くと、祖父は集中治療室に入っていた。沢山の管に繋がれている祖父を見て、僕の心臓がキュツとなったのを今でも覚えている。後で聞いた話だが、祖父は重度の肺炎を患い、「急性呼吸窮迫症候群」と診断された。心筋症も併発し、医師からは

「今晚が峠です。今晚を乗り越えたととしても寝たきりになるでしょう。」

と説明を受けたと母から聞いた。面会の許可があり、集中治療室に入ると、機械音が鳴り響く中、管に繋がれた祖父はぐったりしていた。声をかけても反応はなく、僕は祖父が死んでしまうようで怖くなった。今まで大切な人が亡くなるという経験をしていないので、ただただ怖かった。

親戚も集まり、家で祖父の病状を見守った。祖父が入院している間、会社はどうするのかなどを大人たちが話し合っていた。そのとき祖母が

「お父さん、先月までかけていた保険をすべて解約したのよ。」

と言った。母や親戚は驚いていた。どうやら祖父は

「俺は長生きするから大丈夫。」

と言い、勝手に保険を解約していたらしい。僕の母は呆れた顔で

「お父さんらしいね。」

と言っていたのを覚えている。

そんな祖父は、峠を越えなんと一週間もたたないうちにすべての管を外し、室内を歩いた。治療していた医師や看護師たちはとても驚いたらしい。その後も医師の診断を覆し、治療後はリハビリ病院に移り、六週間で退院した。これには家族も親戚も

「奇跡だ。」

第62回中学生作文コンクール

と思ったようだ。祖父は昔から気が強く、治療しているときも気を抜かなかったのだろう。「病は気から」とは、こういうことなんだなと僕は思った。

祖父が退院し、みんなで快気祝いをした。祖父は

「みんなに心配かけた。あのときはもう死ぬと思った。病室は常に機械音と救急車のサイレンが鳴り響き、気が狂いそうだった。」

と話してくれた。すると僕の母が

「お父さん、一つだけ保険残しておいて良かったね。」

と言った。全部解約されたと思っていていた保険は、一つだけ解約せずに残しておいたらしい。祖母も

「入院保険が使えたから本当に良かった。」

と安心していた。僕は保険はお金のことだけではなく、家族に安心感を与えてくれるものなんだなと感じた。

そんな祖父も今年めでたく喜寿を迎えた。五年前に倒れた後、祖父は反省し、新たに保険に入りなおしたらしい。祖父はまだまだ長生きするつもりだ。保険があるから安心して長生きできるのだろう。